

特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会 災害復興委員会 2020年度 活動報告書

Feature 1

被災地での会議、話し合いがオンラインに

—— オンライン・ファシリテーション支援の現場から

- ・ フェーズごとに变化した「丸森町災害情報共有会議」
～宮城県丸森町の事例より ————— 2
- ・ 名古屋市社会福祉協議会
令和2年度災害ボランティアセンター担当者研修会
「情報共有会議の基礎とオンラインで行う
ファシリテーションと記録を学ぶ」 ————— 2
- ・ 被災地の地元会員が過去の経験を活かして
オンライン会議を支援
～令和2年7月豪雨福岡県情報共有会議の事例より — 3

Feature 2

「プログラムデザイン」という支援

～会議や話し合いは事前準備が大きく影響

- ・ 地元で開催されるワークショップデザインを支援する
～コロナ禍での新しい支援の方法 長野の事例より — 4
- ・ ゴールやプロセスを丁寧に作り込むことで深まる話し合い
～ JVOAD会員向け勉強会 ————— 5

Topic

全国の防災・減災整備に向けた

参加型研修をファシリテーションで支援

～内閣府「官民の多様な主体間の連携研修」 ————— 6

ファシリテーションでの支援をさらに拡げるために ————— 7

2020年度活動一覧 ————— 8

被災地での会議、話し合いがオンラインに ——オンライン・ファシリテーション支援の現場から

フェーズごとに変化した「丸森町災害情報共有会議」 ～宮城県丸森町の事例より

2019年から始まった情報共有会議が、2020年度はコロナ禍のために中止から始まりました。主催団体の一般社団法人YOMOYAMA COMPANYでは「動けることは限られているがこんな状況だからこそ情報共有の機会は必要」と判断し、オンラインで実施することになりました。FAJでは、各回のオンライン会議の内容や進行に合わせて、ファシリテーターやグループファシリテーター、チームでの記録作成を担当させていただきました。この会議運営をサポートしているメンバーは他団体のNPOスタッフや大学教員など様々。毎回、役割を適宜担いました。特に記録は

2-3人のチームで協力し工夫を重ねました。

その後主催団体では、情報共有会議という場をさらに一步発展させて、住民などが集い考えたことを実行するための後押しが大事だと考えました。その結果、情報共有会議は課題などを話し合う場「丸森まるまる円卓会議」に移行しました。(FAJ災害復興委員会、遠藤智栄)

情報共有会議の経過

2019年11月	丸森町災害情報共有会議開始
2020年 3月	コロナ禍により中止
4月	オンライン形式により再開
6月	拡大版を開催、大学生らが多く参加 (※リフレット画像右上)
10月	会議形態を移行 丸森まるまる円卓会議を開催 (※リフレット画像右下)
2021年 2月	丸森まるまる円卓会議 第3回を開催



(上) 丸森町災害情報共有会議
拡大版
(右) 丸森まるまる円卓会議



名古屋市社会福祉協議会 令和2年度災害ボランティアセンター担当者研修会 「情報共有会議の基礎とオンラインで行うファシリテーションと記録を学ぶ」

2021年の1月、名古屋市の社会福祉協議会や区役所のスタッフが表記テーマで学び合う場をサポートしました。今回は、FAJの支援実績からオンラインの実践が豊富だということでご依頼をいただきました。

当日の研修内容は、被災地の現場の状況を再現したものを体験いただき、臨場感あふれるものになりました。さらには、後日オンラインで実施された「災害ボランティアセンター三者合同研修」で本研修の経験が生かされることになりました。(FAJ災害復興委員会、遠藤智栄)

研修プログラムの概要(3時間)

- ・ あいさつ、導入
- ・ FAJの活動紹介
- ・ 情報提供：情報共有会議とオンライン化
- ・ 情報提供：オンラインファシリテーションのヒント
- ・ 事例共有：丸森町災害情報共有会議
- ・ 事例共有：福岡県情報共有会議
- ・ グループワーク：グループ進行役の実践、チームで記録作成の実践
- ・ 研修のふりかえり

新型コロナウイルス禍では、コミュニケーションのオンライン化が進みましたが、これは被災地での「会議」、「話し合い」においても例外ではありませんでした。突然の変化に被災地での多様な主体はどのように対応したのでしょうか。ここでは日本ファシリテーション協会が支援した3つの事例から、その実態をお届けします。

被災地の地元会員が過去の経験を活かしてオンライン会議を支援 ～令和2年7月豪雨福岡県情報共有会議の事例より

九州では毎年のように大雨による被害が発生しており、令和2年も福岡県では7月初旬の豪雨で久留米市や大牟田市を中心に家屋が浸水し、避難を余儀なくされました。

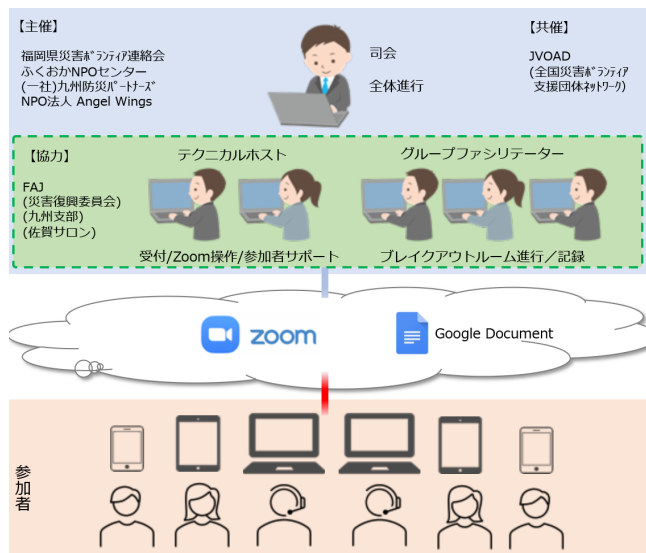
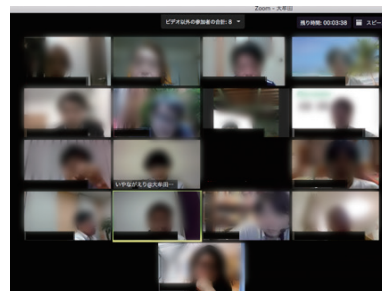
発災直後の7月11日を最初に、福岡県域でのオンライン情報共有会議が合計4回開催され、私たちはオンライン上の技術サポート、分科会でのグループファシリテーターや記録ボランティアを行い、情報共有会議の運営を支援しました。初めてのオンライン開催であったにもかかわらずスムーズに開催・運営が出来たのは、平成29年の九州北部豪雨や令和元年の佐賀豪雨の際に、FAJ九州支部や佐賀サロンのメンバーが被災地での情報共有会議の支援に関わっており、その経験を活かして地域のメンバーが主体となって今回のオンライン情報共有会議を支援したことが大きかったと感じます。

一方で、今回はコロナ禍の影響で被災地に入り実際の状況を目で見て、被災者の話を聞くことができなかったため、被災地域への適切な支援や支援団体同士の連携に繋がらなかったかという、まだまだ課題も多いです。

いつどこで災害が起こってもおかしくない今日、身近で災害が起こった際にファシリテーターとして被災地での情報整理や調整

に関わる人材を一人でも多く育成することが急務だと感じています。災害復興委員会としては、来年度より被災地

でのファシリテーションに関心がある人のネットワーク構築と人材育成に取り組んでいく予定です。(FAJ災害復興委員会、平山猛)



主催者からの声

今回、研修をお願いして良かったのは「研修内容がお話とワークを組み合わせ、参加者に動いてもらうことが多い実践型だったこと」です。参加者からも「オンラインツールの必要性を感じ、興味はあったもののわざわざ調べて導入するのは難しかった。でも研修で実践できて職場への導入につながった」という声をいただき主催としてうれしく感じています。その後には、「災害ボランティアセンター三者合同研修 テーマ：情報共有会議」がオンラインであり、早速研修で習った

ことを実践・活用して情報共有することができました。FAJ災害復興委員会さんとの出会いは、FAJ中部支部の定例会への協力でした。災害時の情報共有会議の支援を実践されているということを知り、その際丁寧に準備しながら被災地支援をしているのだなと実感しました。

名古屋市社会福祉協議会
若森由紀子

「プログラムデザイン」という支援

～会議や話し合いは事前準備が大きく影響

地元で開催されるワークショップデザインを支援する ～コロナ禍での新しい支援の方法 長野の事例より

2020年6月に長野市の市民協働サポートセンターの阿部さんから、長野市災害時支援ネットワーク交流会というイベントを手伝って欲しいという連絡がありました。阿部さんとは2019年台風19号に伴う情報共有会議からのご縁でした。当初は現地入りの予定でしたが、コロナの影響で現地には入れないため、今回はイベントのプログラムデザイン(当日の進行や運営)のアドバイスが欲しいということでした。

これまで関わっていた鈴木と浦山、そして市民協働サポートセンターの阿部さん・長野市災害ボランティア委員会の皆さん、長野県社協の持元さん(FAJ会員)と共にオンライン会議を2回実施しました。コロナ前まで、現地に入り活動をしていたので、みなさんと面識があったことで、オンラインでもスムーズにスタートすることができました。

初回では私たちFAJに期待する役割を確認した後、企画に対する皆さんの思いや願い、実施終了後にこうありたいという姿などを伺い整理をすることから始めました。私と鈴木は、それぞれ自宅からのオンライン参加、企画者のみなさんは一か所にリアルに集まっていた会議でした。現地にいるFAJ会員の持元さんが現

地会議室のホワイトボードに板書をし、私たちも画面越しにそれを見ながら話し合いました。この話し合いで、やりたいことの元になっている思いや願いが明確になりプログラムの骨子が固まりました。

次に課題になったのは、対面イベントには不可欠な感染防止に対する場づくり(会場の換気、机や椅子の配置、受付までの動線、トイレ休憩の組み方や場所の指定など)でした。そこで2回目の打ち合わせは実施する会場の場づくりを考えました。当日の会場とオンラインで結んで、机や椅子なども動かしながら、対応を共に考えていきました。実際場で動いてみることで、感染予防対策を講じながら、参加者同士のネットワークも強化できる場づくりのために、当日のグループファシリテーターの役割や、ネームカードの工夫、グループワーク後の全体共有の方法についてなど細かいアイデアを出し合うことができました。

今回は、現地に出向きその場で共につくっていくという支援ではなく、オンラインを活用して準備段階でしっかりと関わる新しい支援の方法でした。(FAJ災害復興委員会、浦山絵里)



上) 当日現地での進行打ち合わせの風景：当日も事前準備が大切
下) ZOOMを使ったプログラムづくりの支援

主催者・参加者からの声

長野市域の災害時支援ネットワーク構築に向けての大切な一歩となった交流会。みなさんにご協力いただけたことは収穫でした。私たちは熱い思いはあるものの、どう場をつくればいいのかが明確でない状態でした。「参加者が帰る時にどうなっていてほしい?」という問いをいただき、交流会の目的を明確にすることができました。全体の設計や時間配分、グループワークのテーマ設定までしっかり作っておくことが大切だと学びました。また、感染対策についても必要なことを一つ一つ出し合い、積み上げていくプロセスが重要だと感じました。参加者からは「話せてよかった」「また開催を」の声をもらい、大成功でした!

長野市市民協働サポートセンター
「まんまる」センター長
阿部今日子

会議や話し合いを充実させるためのファシリテーションでは、話し合いの設計ともいえる「プログラムデザイン」や、どのような空間で話し合うかという「場づくり」など事前に考えるべきことが多くあります。今回は、ファシリテーションによる支援の中でも事前準備に焦点をあて、事例をご紹介します。

ゴールやプロセスを丁寧に作り込むことで深まる話し合い
～ JVOAD会員向け勉強会

認定特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）主催のコロナ禍で災害支援を考えるオンラインでの4回シリーズ会員向け勉強会最終回をコーディネーター、メインファシリテーター、グループファシリテーターの4名で協力しました。主催者、登壇者との打ち合わせでは終了した2回分と、この後開催する3回目の企画内容の共有からスタートし、プログラムデザインも意見交換しながら一緒に考えていくプロセスを取りました。また、今までの勉強会は講演が終わると意見交換前に退出する参加者が多数いると聞き、実際に3回目の勉強会に参加し、場の雰囲気やプログラム上の課題を確認しました。本番当日に向けてSNSグループづくり、情報共有や意見交換も始めました。

勉強会のテーマは「これからの災害支援に生きるつながり、連携」1～3回の勉強会でのポイント説明、“つながり”を活かすコツ～味の素ファンデーションの取り組みから～齋藤由里子氏講演、グループでの意見交換と大枠は決まっていますが、プログラムデザインのよりどころとなるゴールは、何度も主催者に問いかけ、齋藤さんも含め話し合いながら確認していきました。講演後、意見交換前に参加者が退出してしまうという問題に対しては、前半にグループでの自己紹介を入れて、まずは参加者同士が知り合ってもらう工夫をしました。また、終了後には登壇者への質問や参加者同士が交流できる時間をつくりました。

意見交換の場で参加者に投げかける「問い」は「改めて参加者が何を求めているか知りたい」という思いから、申し込み時に

勉強会に期待することを聞き、それをもとに齋藤さんが講演内容を決め、その講演内容をもとに「問い」を改めて決めました。この勉強会のテーマと同じように、私たちもつながり連携しながら当日までのプロセスを作り込んでいけたのではないかと思います。(FAJ災害復興委員会、鈴木まり子)

時間	内容	進行	担当者	平山	鈴木	飯島
13:30~14:00	F&A内部打ち合わせ ・進行内容及び収録機材		神元さん			
14:00~14:45	JVOADとの打ち合わせ ・進行内容及び収録機材 (神元さん、菅藤さん) ・「本館@所属」へ各館の要項を送付 ・進行内容及びリテックホスト支援機材 (テクニカルホスト)		神元さん			
14:45~15:30	・入室確認 ・参加者音声確認 ・「本館@所属」へ各館の要項を送付		神元さん			
15:30~15:10	1. オープニング&挨拶 オープニング 一環旨説明 一注意事項の連絡 一栗田さんより挨拶(5分)		神元さん			
15:10~15:25	2. 前3回のふりかえり (概要紹介) 前3回の概要紹介 (F&Aへのつながり) ※ここからF&A通行		平山			
15:25~15:35	3. グループ内自己紹介 インストラクター一環 →フアンリターター一環 →その後の進め方説明 →グループ内自己紹介の進め方説明 →グループ内自己紹介ルームへ移動 (7:30~8:45)		平山			
15:35~16:00	4. 自己紹介 (1人1分以内) ①名前、②所属、③通常の活動 ④タイムスケジュールに移動 (菅藤さんへのつながり)		菅藤さん			
16:00~16:15	5. 菅藤さんより事例報告 菅藤さん事例報告 (20分) 一友へパペ →フェーズブリー 一 (5分)		平山			
16:15~16:30	6. 自己紹介 (1人1分以内) ①名前、②所属、③通常の活動 ④タイムスケジュールに移動 (菅藤さんへのつながり)		菅藤さん			

タイムスケジュールだけでなく各人の動きも詳細に記入した進行表(フォーマットはFAJフェロー加留部オリジナル)

主催者・登壇者からの声

オンラインになり多様な参加者がいる中、同じテーマに対して様々な視点で意見交換をしてもらいたいと思っていましたが、意見交換まで参加する方が少ないという課題がありました。目的、ゴールだけでなく、課題解決に向けても事前に相談し、準備ができたのは非常にありがたく、こちらも勉強になりました。

認定特定非営利活動法人

全国災害ボランティア支援団体ネットワーク

広報部ファンドレイジング担当 神元幸津江

事前の参加者ニーズの把握は当方からの要望でした。これにより事前準備の手間が増えハードルも上がりましたが、JVOAD様と一緒に丁寧に対応して頂き、お蔭で的を得た準備が出来ました。また、当日も進行・盛り上げ等丁寧にご対応頂き、当方は安心して参加者との対話に集中できました。有難うございました。

公益財団法人 味の素ファンデーション

被災地復興応援事業 統括マネージャー 齋藤由里子

全国の防災・減災整備に向けた 参加型研修をファシリテーションで支援 ～内閣府「官民の多様な主体間の連携研修」～

2018年より、内閣府と各地方自治体が共催で、行政・社会福祉協議会・NPO等の連携を目的とした研修会が実施されています。

日本ファシリテーション協会では初年度より、参加型のグループワーク部分のプログラムデザインと進行を担当しています。

2018年より支援している内閣府が主催する「官民の多様な主体間の連携研修」ですが、2020年度は災害時に支援調整ができる人材を育成するという趣旨のもと、中核人材研修も加わり、10回の研修会が開催されました。内閣府から事業受託された会社からの依頼のもと、FAJは演習のパートを担いました。コロナの影響により、開催都府県の事情を加味しながら、オンライン型、ハイブリッド型、リアル型、人数も50名/回～200名/回(参加者は行政、社協、NPO等)と様々な状況下のもと研修を手伝うことになりました。

演習パートでは内閣府、JVOD(※)、事業受託会社等と事前の打ち合わせを入念に行いました。演習を通じて、被災

者の困りごと、支援体制や連携方法のイメージを自分ごととして持ち帰り、どうすれば平時の連携へと繋げることができるかについてFAJからも様々な意見や提案を行い演習のプログラムを考えました。また、毎回200名が参加した中核人材研修(4回コース)では、参加者から他県の状況を知る機会や情報交換する機会がほしいという意見も多くあり、いかに意見交換の場を有意義にするかに苦心しました。

参加者からは、他県の情報交換が参考になったなどの感想もいただき、改めて情報や知恵を共有、交換する場の大切さを感じたことと、そのような場をつくるのができ少しはお役に立てたのではないかと思います。なにより、この研修を手伝う



群馬県での開催の様子

ことで、30以上の都府県にFAJ災害復興委員会の存在を知ってもらえたことは、今後、災害発生した場合に、私たちが活動する上でも大きな意義を持つと考えています。(FAJ災害復興委員会、杉村郁雄)

※認定特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク

多様な支援主体間の連携が、多様な被災者ニーズに応えていく唯一の方法

災害救援の柱は行政です。しかし、災害の規模が甚大であればあるほど、行政だけで被災者ニーズに応えることには限界があります。阪神・淡路大震災でボランティア元年と呼ばれ、以降、災害時にボランティアがいない現場は、もはやないと言えます。それを支える災害ボランティアセンターは、地元の社会福祉協議会によって運営されます。しかし、ここでも応えられるのは被災者ニーズの一部です。例えば、避難所運営、重機を使った活動、子どもや障がい者等への支援などは、専門性が高いNPOの存在は欠かせません。さらに、被災地へ組織的・継続的に人材や物資等を届けることが可能な企業や生協、JCなどの各種団体、それらを資金で支える助成団体など、多様な支援主体の存在が被災地支援の

大きな力となっています。さらに、こうした支援主体間の連携が、支援の漏れ・ムラをなくし、多様な被災者ニーズに応えていく唯一の方法だと考えます。

これを災害時に機能させるためには、平常時から互いの強みや限界も理解し合い、緊急時にはすぐに協力し合える関係構築が不可欠です。「言うは易く行は難し」ですが、関係者間で協議を重ね、研修や訓練を日々共にしていくことが何より重要だと考えています。

認定特定非営利活動法人
全国災害ボランティア支援団体ネットワーク
代表理事 栗田暢之



「私に出来ること」への思いから支援活動へ

—丸森災害情報共有会議(宮城県)

台風通過数日後「何か自分たちに出来ることないかと思って。また後で連絡する。」と知人からのメッセージ。そこから「私に出来ること」への思いが増し「板書ボランティア練習会in仙台」の参加がきっかけとなり今回の支援活動につながりました。私が参加をはじめた2020年は新型コロナウイルスの発生と重なり感染防止の為にオンラインという新たなカタチでの開催でした。私は記録係を担当しましたが、事前の地域情報収集やメンバー間の連携により成果ある活動につながることを実感しました。今後はオンラインツールの効果的な活かし方や遠隔地でも持続的な地域に寄り添える支援活動など共に考えていきたいです。

■■ 佐藤由紀子(宮城県在住)

理解し合い、繋がり合うことの重要性

—内閣府官民の多様な主体間の連携研修など(群馬県)

今回関わった場はどちらも防災・減災に向けた活動で、コロナ禍により一層つながり難い状況下において、いかに相互に理解し合いつながり合い、いざという時に連携していけるかがテーマでした。私たちは参加者が主体となり、つながり易くなるための参加型の場づくりのお手伝いをしたのですが、主催者や話題提供者の方との丁寧な事前準備のコミュニケーション自体が、お互いの情報を交換し理解し合いながら、関係を深め連携していく時間になったのが印象的でした。まさに、このプロセスの重要性が社会に伝わっていくことも、防災・減災に向けたファシリテーションとして重要なステップになるのではと感じました。

■■ 飯島邦子(東京都在住)

FAJ

活動に参加した
FAJ会員から

ファシリテーションでの支援をさらに拡げるために

日本ファシリテーション協会では、毎年、全国各地で続発している災害に対して、少しでもファシリテーションによる支援が多くできるよう、支援体制の拡充と被災地でのファシリテーターの育成に努めています。今回は各地の話し合いの支援を担当した協会会員の声をお届けします。

多種多様なボランティアの関わり方を知る

—令和2年7月豪雨福岡県情報共有会議(福岡県)

令和2年7月豪雨の福岡県情報共有会議(オンライン)をテクニカルサポート役として支援させていただいた。主にブレイクアウトルーム作成や話している方のピン止め(※)を行う程度のサポートだったが、参加者のやり取りから、ボランティアの関わり方と受け入れ方が多種多様であることを知ることができた。災害の種類や地域によって、被害状況だけでなく生活再建の進め方も異なるため、今回のような情報共有の場が、早め早めに行われる必要性を感じた。また、組織の縦割りで起こりがちな問題も表面化するため、災害復興支援の経験の蓄積がそのような問題の解決の糸口になる可能性があるのではと感じた。

※画面上、大きく表示されるよう固定すること

■■ 柿原寿人(福岡県在住)

この経験をもとに多様な現場と向き合える支援へ

—令和2年7月豪雨福岡県情報共有会議(福岡県)

令和元年8月佐賀豪雨の発災直後から佐賀県災害支援プラットフォームのメンバーとして情報共有会議を運営した経験があり、今回は被災者支援と同時に、福岡での情報共有会議の運営にも興味があって参加しました。オンライン会議だったことも影響しているかもしれませんが、以前体験した厳しい言葉のやり取り等は感じられず、刻々と状況が移り変わり緊迫した中でも、参加者同士がお互いへの心遣いとも感じられる優しい言葉遣いが多くあったのが印象的でした。今回の支援は他の地域の情報共有会議運営を知るよい経験になり、今後も多様な現場と向き合える被災地支援を行いたいと考えています。

■■ 鈴木智恵子(佐賀県在住)

予告

2021年度事業：災害復興ファシリテーター養成講座(仮称)

毎年、各地で自然災害が頻発するようになった今、日本ファシリテーション協会災害復興委員会では、10年間に及ぶファシリテーションによる復興支援の経験を活かして「災害復興ファシリテーター養成講座(仮称)」を実施予定です。現在、詳細を企画中ですが、協会会員に限らず幅広い方々を対象に行う

予定です。実施スケジュールは未定ですが、詳細が決まりましたらウェブサイトなどであらためてご案内します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

〈FAJ災害復興委員会ウェブサイト〉

<http://www.faj.or.jp/activity/reconstruction/>

2020年度 活動一覧

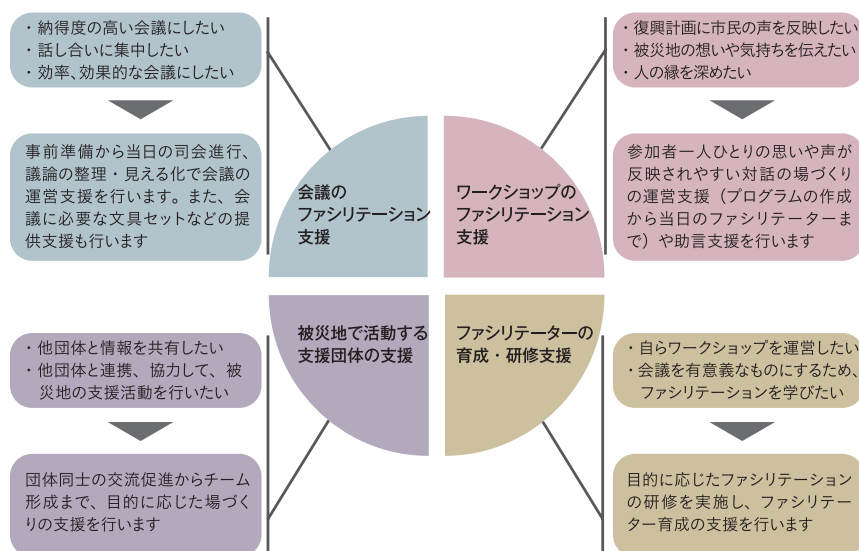
4月22日、25日	丸森町災害情報共有会議(オンライン)	11月17日	内閣府官民の多様な主体間の連携研修 / 群馬県(群馬県前橋市)
5月13日、15日	丸森町災害情報共有会議(オンライン)		
6月13日	丸森町災害情報共有会議(オンライン)	11月24日	内閣府官民の多様な主体間の連携研修 / 愛知県(オンライン)
6月18日	坂町地域支え合いセンターコア会議(オンライン)		
6月18日、22日	NPOカフェまんまる×長野市災害時支援ネットワーク交流会企画会議(オンライン)	11月30日	内閣府官民の多様な主体間の連携研修中核人材研修(オンライン)
7月11日	令和2年7月豪雨福岡県情報共有会議(オンライン)	12月9日	JVOAD会員向け勉強会(オンライン)
7月13日	丸森町災害情報共有会議(オンライン)	12月28日	内閣府官民の多様な主体間の連携研修 / 鹿児島県(オンライン)
7月21日	令和2年7月豪雨福岡県情報共有会議(オンライン)		
7月30日	令和2年7月豪雨福岡県情報共有会議(オンライン)	1月19日	名古屋市社協 災害ボランティア担当者研修会(オンライン)
8月6日	令和2年7月豪雨福岡県情報共有会議(オンライン)		
8月19日	坂町地域支え合いセンターコア会議(オンライン)	1月27日	内閣府官民の多様な主体間の連携研修 / 静岡県(オンライン)
9月7日	丸森町災害情報共有会議(オンライン)		
10月27日	内閣府官民の多様な主体間の連携研修 / 徳島県(徳島県徳島市、三好市、美波町)	3月18日	内閣府官民の多様な主体間の連携研修 / さいたま市(埼玉県さいたま市)
11月6日	内閣府官民の多様な主体間の連携研修 / 中核人材研修(オンライン)	※活動会員数70人、受益者(会員) 37人、受益者(一般) 1620人、総計1721人(いずれも延べ人数)	

日本ファシリテーション協会と災害復興委員会

ファシリテーション(Facilitation)——、人と人、人とコトとの関わり方に働きかけ、集団による学習や問題解決、未来創造などの場においてプロセスと結果がよりよいものとなるよう支援・促進することを意味します。その役割を担うのがファシリテーターで、話し合いの場で参加と相互作用を促す進行役などがわかりやすい例です。

特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会(FAJ: Facilitators Association of Japan)は、ファシリテーションの普及を通じて、多様な人々が協働しあう自律分散型社会の発展を目指し2003年に法人として設立、2004年には内閣府より特定非営利活動法人(NPO)の認証をうけました。2020年5月現在、約1356名の会員が活躍する団体となっています。

災害復興委員会は、2011年3月11日に東北・関東を襲った地震・津波・原発事故の複合大災害直後にFAJ内に設置され、以後、「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」、「支援機関同士のネットワーク強化」を柱に各地で活動しています。



特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 災害復興委員会 2020年度 活動報告書

2021年5月11日発行

編集 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 災害復興委員会

浅羽雄介、浦山絵里、遠藤智栄、遠藤紀子、杉村郁雄、鈴木まり子、疋田恵子、平山猛、山田真司

発行 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 東京都渋谷区千駄ヶ谷三丁目12番8号 www.faj.or.jp

お問い合わせ(Eメール) fukkou311@faj.or.jp